言葉による見方考え方を働かせる国語科教育――苅谷夏子さんと問い直す「ことば」の教育――(2022年度東北学院大学文学部教育学科連続公開講義「教科教育から考えるロゴスの内と外」第4回)

メタデータ	言語: ja
	出版者:
	公開日: 2023-03-20
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 渡辺, 通子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/25025

2022 年度東北学院大学文学部教育学科連続公開講義「教科教育から考える ロゴスの内と外」 第 4 回
2022 年 11 月 19 日（土）12：30〜15：40

言葉による見方考え方を働かせる国語科教育
―― 苅谷夏子さんと問い直す「ことば」の教育 ――

A Way of National Language Education about making perspectives and ideas by Japanese language
―― Language Education to reconsider with Mrs.Kariya Natsuko ――

講師：渡辺　通子（東北学院大学文学部教育学科　教授）
WATANABE Michiko

キーワード：言葉による見方考え方，国語科教育，大村はま，学習指導要領（2017, 2018）
Key words : perspectives and ideas by Japanese language, Omura Hama, teacher education

開催にあたって，公開講座のテーマの意義を共有した。次に，新学習指導要領にみられる国語科教科構成の変化と高等学校国語科の科目再編の特長をとりあげ，小中高を見通したリテラシーの育成について確認した。その上で，ゲストの苅谷夏子氏（大村はま記念国語教育の会事務局長）との対談を行った。

1.　テーマの共有

全体テーマである「教科教育から考えるロゴスの内と外」については，「講座概要」の解説によれば，国語科教育は言葉や言語に関わる教育のための教科であり，ロゴスの内側にあると位置づけるのが妥当であろう。だが，国語科教育の範囲は広く，言語以外にも，音声や身振り手振りなど，言語ならざるものの働きもその対象となる。本講座では，ロゴスの内と外に分けるというよりは，内と外とをパースペクティブな視点で捉えることにした。

次に，国語科教育のテーマ「言葉による見方考え方を働かせる国語科教育」は，新学習指導要領（2017, 2018）の国語科のキーワードの一つである。「見方考え方を働かせる」とは，各教科，各校種に共通するものであり，小中高『学習指導要領解説「国語編」』（文部科学省，2018.7）では，次のように解説する。

> 深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること。各教科等の「見方・考え方」は，「どのような視点で物事を捉え，どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり，教科等の学習と社会をつなぐものであることから，児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせるこ

とができるようにすることにこそ，教師の専門性が発揮されることが求められること。

つまり，「言葉による見方考え方を働かせる」ことは，国語科の学びの本質的意義づけの中核であり，ここにこそ教師のプロとしての専門的力量が試される。管見だが，「言葉による見方考え方を働かせる」ことの具体について言及したものは少ない。

2. 学習指導要領（2017, 2018）に示す国語科教育の方向性

今回の改訂によって，国語科の構成は，これまで「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「C 読むこと」としていたものが，「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力，人間性等」の 3 つとなり，国語科以外の教科の構成と足並みを揃えた。

「思考力・判断力・表現力」には，「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「C 読むこと」が置かれているので，実践にあたって大きな戸惑いを招くことはないだろうが，国語科カリキュラムの制度としては大きな変化である。また，「知識及び技能」は，「言語機能・言語用法に関する事項」「情報の扱い方に関する事項」「我が国の言語文化に関する事項」の 3 つから構成された。「情報の扱い方に関する事項」はこれまでなかったものである。

特に，高等学校では「国語総合」が「現代の国語」へ変わり，また，新たに「論理国語」や「文学国語」が加わるなど変化がみられた。小中学校段階では，市民的リテラシーを身につけることが主眼とするが，高等学校段階では，研究や学問リテラシーに繋がることを見通したものとなっている。

3. 対談-苅谷夏子さんと問い直す「ことば」の教育

苅谷氏は，大村の最後の教え子であり，晩年の大村を支えて全国の講演に付き添った。こうした経緯から大村との共著『教えることの復権』（筑摩書房 2003）の外，『評伝　大村はま』（小学館 2010）や『大村はま優劣のかなたに―遺された 60 のことば』（筑摩書房 2012），『ことばの教育を問いなおす―国語・英語の現在と未来』（筑摩書房 2019）がある。

対談では，まず，大村はま国語教室では，実際にどのような授業が展開されたのか，具体的な内容をお話しいただいた。大村の偉大さだけが一人歩きし，大村による自作教材「手引き」の存在を知るものの，具体的な授業の内容や使われ方を知る人は意外と少ない。当日は，「花火の表現くらべ」，「脚本がよびかけてくる」，「国語教師大村はまのことばを育て，こころを育てた思想」の 3 資料をもとに，大村はま教室の姿が紹介された。

「花火の表現くらべ」は，1979（昭和 54）年，前年に復活した隅田川花火大会についての 4 社（朝日，毎日，読売，東京）の新聞記事をまとめたもので，表現を読み比べる学習を目的とする「手引き」である。

授業では，まず，同一のことばを用いた箇所，同じ情景を異なることばを用いている箇所を確認する。比較することで，語意だけでなく，語感の違いも確認する。次に，各社の記事の表現の違いを基に，同じ事実であっても，書き手によって視点の中心や読者に訴え

たいことが異なることを探っていく。これらの一連の学習活動を学習者同士のディスカッションを通して行う。その際，メモを取ることを義務づける。

大村国語教室で重視されていた「比べる」こと，グループ学習を主とした方法は，新学習指導要領で重視されるアクティブ・ラーニングである。表現を「比べる」ことは，新たに加わった「情報の扱い方に関する事項」の内容である。小学校低学年「(1) 情報と情報の関係」に，「共通，相違，事柄の順序など情報と情報との関係について理解すること」，小学校中学年「(2) 情報の整理」に，「比較や分類の仕方…」，中学校 1 年「(2) 情報の整理」に，「比較や分類，関係付けなど…」とあり，「思考力・判断力・表現力」と結びつく国語科の重要な「知識・理解」の内容とされる。

このことからは，1940 年代に遡る大村実践は，蓄積を重ね，時代を経て，2020 年代には，対象を中学校から小学校段階に繰り下げて実施することが可能となっていることがうかがえる。大村実践は古びていない。

次に，大村国語教室を振り返り，学び手の一人である M 君が教室で身につけた学力を，「僕があの教室で得たものは OS だと思う。コンピュータで言えばね。」（鳥飼・苅谷・苅谷，2019：p32）と述べていることについて，OS という比喩が意味するところを具体的に説明していただいた。それは，ことばの使用の枠組みのようなものであり，これが身についていると他の言語を習得する際にも役立つものである。母語の教育としての国語教育の重要性を確認する場面であった。

同著では，苅谷剛彦氏が言語に依存しない，考えるためのスキルを習得した体験を「中間地帯」と名付けて説明している。対談では，日本語を使用する際にも，英語やその他の言語を使用する際にも働くという「中間地帯」の存在については確認するにとどまった。国語教育も，外国語教育も，ことばの教育であることから，「中間地帯」がいかなるものかについての詳細は課題となった。

参考文献・引用文献

鳥飼久美子・苅谷夏子・苅谷剛彦（2019）『ことばの教育を問いなおす―国語・英語の現在と未来』筑摩書房.